

# 帰国後、友人との関係づくりが 難しそうです。 親としてどんなアドバイスを すべきでしょうか。

海外子女教育振興財団  
教育アドバイザー

中村 昌子



プロフィール (なかむら まさこ)  
1984年から帰国生だけの特設学級(国際学級)を併設する東京学芸大学附属大泉小学校に35年間勤務する。その間、国際学級主任、担任を経験し、帰国生への相談・面接等も担当する。2012年より同校主幹教諭。退職後、19年より同校非常勤講師、東京学芸大学非常勤講師を務める。20年10月より海外子女教育振興財団の教育アドバイザー。

## はじめに

海外での生活を終え、日本に帰国して新たな学校生活をスタートされたお子さんにとって、新しい学校での友達づくりというのは大きな期待と不安が入りまじったものであると思います。とりわけ海外生活が長く、日

本の学校生活が初めてであったり、思春期に差しかかっている友達づくりにさまざまな思いが交錯しがちな時期に帰国したりする場合は、その後の学校生活にも大きな影響を持つことも考えられます。

そんななかでお子さんから不安を打ち明けられたり、不安な様子がかえりたりする保護者の皆さんのご心配は大きなものでしょう。

まずはいつしよに考えてあげること、でも最後はお子さん自身が自分で解決するという考え方を大切にしていただければと思います。

## 1. 事実関係をしっかりと聞く

お子さんが友達づくりで困っているとき、またそのような様子がうかがわれたときに大切なことは、「どんなことで困っているのか」「何かきっかけになる出来事があったのか」等、そこにある事実関係を聞き取るという

ことです。

「いつ、どんな状況で、どんなことがあったのか、どんなことを言われたのか」等を冷静に聞いてあげる、さらに「そのときお子さん自身がどう思ったのか、どんな行動を取ったのか」等も聞けるといいと思います。そして聞いた話については共感してあげましょう。

「それはつらかったね」「そんなことがあったんだ。それでもよくがんばって学校に行けているから偉いね」等、まずは寄り添ってあげることが大切です。

「それはあなたの○○がまずかったのではないの?」とか「そんな意地悪されたの?」先生に話したの?」等、ネガティブな声かけをするのは絶対に避けましょう。

そうはいつてもお子さんの年齢や性格によっても対応の仕方は違ってきます。思春期に入る小学校高学年以上のお子さんならあまりあれこれ聞いてほしく



ないという場合もあるでしょう。性格的にスムーズに話をしないタイプのお子さんもいることでしょう。

そのような場合は、少し「待ち」の姿勢でいきましょう。そしてさりげなく「困ったらいつでも話してね。いつでも味方だからね」ということを伝えておきましょう。

年齢の低いお子さんや、お子さん自身がたくさん話したいタイプの場合はとにかくよく聞いてあげることです。

忙しいからといって「あとでね」ではなく、「いま」聞いてほしいというタイミングを逃さないことが大切です。また途中

でさえぎったり、話をまとめにかかったりせかしたりするのはご法度です。

## 2.「どうすればよいか」をいっしょに考える

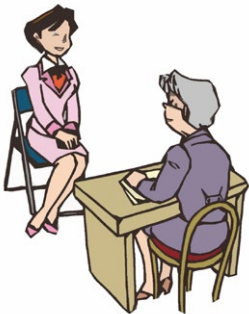
### ①子どもの気持ちを確かめる

いまの状況を少しでも改善するためにこれからどうしていけばよいか、いまお子さんがどうしてほしいかをまず確認しましょう。

「学校の先生に助けを求めたい」「学校の先生には話してほしくない」等、お子さんの年齢や性格を考慮しながら、そのときにお子さんはどう思っているかをよく聞きます。「先生に話してほしくない」とお子さんが思っているのに、保護者が先走って動くとかえつてうまくいかないことがよくあります。お子さんからの信頼も失いかねませんので、そこは十分に気をつけましょう。

### ②先生の力を求める場合

年齢の低いお子さんなら、先生に話してほしい、先生の力を借りたいということもあるでしょう。そのような場合は、まず学校の先生に「友達づくりで悩んでいるようだが、学校ではどのような様子か教えてほしい」という方向で話をしましょう。そのなかで、お子さんから聞いた事実関係を先生に伝え、「実際にそのようなことがあるのか」「先生はそのことを把握しているのか」を聞きます。先生が十分に把握しているようであれば先生にお任せすることが大切です。



万が一、先生が気づいていなかったら、お子さんの困っている状況を伝え、配慮していただくようお願いします。なお、その際は先生を非難したりせず、ことばも選んで上手に伝えてください。先生と良好な関係を築くことも解決のカギになります。子どもの年齢が上がってきて保護者には介入してほしくないという気持ちであれば、自分で先生に困っていることを伝え、力を貸してもらうことを勧めてみましょう。

### ③仲よくはできているけれど、海外の友達との違いが気になってしまう場合

年齢の高いお子さんによくあることは「それなりに楽しく過ごす友達はいら」「特に仲間外れにされていることもなくみんな助けてくれる」、でも海外の学校で話題にしていたようなことを友達と話すことができない、興味・関心が友達と合わない、

など本人の中で気持ちがいまいかかないことがあるというケースです。

海外で培ったさまざまな価値観や経験を発揮して活躍できる場が少なかったり、海外と日本の文化の違いに悩んだりすることが当てはまります。

このような場合には、少し時間をかけてでも焦らずに自分の考えや経験を友達に伝えていくことが大切であるとアドバイスしましょう。

また友達に無理に合わせる必要はないが、友達が興味・関心を持つていることを自分も試してみたり、多様な考えを受け入れたりすることもアドバイスしてあげてください。

### 3. 居場所づくりを考える

学校の仲間づくりには、時間がかかることもあります。焦らず、寄り添っていくことが大切であることはいうまでもありませんが、お子さんの気持ちがある

ヤモヤした状況が長く続くのはあまりよいことではありません。少しでも気持ちが楽になるような環境づくりの手助けが必要になります。

たとえば、学校以外でお子さん自身が楽しんだり、ほっとできたり、安心できたりするような場があるとよいでしょう。

海外生活の長かったお子さんにお勧めなのが帰国児童・生徒のための「外国語保持教室」です。一般的な英会話教室等ではなく、自分と同じような異文化という環境で生活してきたお子さんが集まる場所です。

学校では思い切り話すことのできない英語等で友達とたくさんおしゃべりをしたり、得意な語学をさらに伸ばす機会を得たりすることで、お子さんは安心できます。そこで仲よくなった友達が心の支えとなり、勇気を持ってたり学校で苦勞している友達づくりのヒントを得たりできるかもしれません。

ほかにも海外で取り組んでいた習い事などを日本でも継続する、自分が得意なスポーツのチームに所属する等の方法も有効です。

お子さんが困っているときは、そんな方法を提案してあげてみてはいかがでしょうか。

### 終わりに

何よりも大切なことは、「お父さんやお母さんはいつもあなたの味方だよ」「困っていることは何でも話してね」という保護者の姿勢です。

いっしょに考えてあげるのはいちよに落ち込んだり不安になつてしまつたりするのではなく、少しでもよかつたこと、楽しかつたことを話題にして安心できる雰囲気づくりを心がけてください。

またどんな小さなことでもよいので友達にすることが話題

になつたら、「○○さんはとっても優しい人なんだね」「○○さんのそういうところが素晴らしいね」といったように、友達のよいところをたくさん見つけて、お子さんが友達のよさに目が向くようにしてあげるとよいでしょう。

「友達づくり」は本来なら子どもが自分自身の力で進めるものです。必要以上に介入するのではなく、自分の力で友達づくりができるように、前向きに支えてあげてください。

